

2020. 12. 20 第三主日待降節Ⅳクリスマス賛美礼拝

ルカ 2 : 8-20 「賛美で知らせるクリスマス」

聖書

- 8 さて、その地方で、羊飼いたちが野宿をしながら、羊の群れの夜番をしていた。
- 9 すると、主の使いが彼らのところに来て、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。
- 10 御使いは彼らに言った。「恐れることはありません。見なさい。私は、この民全体に与えられる、大きな喜びを告げ知らせます。
- 11 今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。
- 12 あなたがたは、布にくるまって飼葉桶に寝ているみどりごを見つけます。それが、あなたがたのためのしるしです。」
- 13 すると突然、その御使いと一緒におびたしい数の天の軍勢が現れて、神を賛美した。
- 14 「いと高き所で、栄光が神にあるように。地の上で、平和がみこころにかなう人々にあるように。」
- 15 御使いたちが彼らから離れて天に帰ったとき、羊飼いたちは話し合った。「さあ、ベツレヘムまで行って、主が私たちに知らせてくださったこの出来事を見届けて来よう。」
- 16 そして急いで行って、マリアとヨセフと、飼葉桶に寝ているみどりごを捜し当てた。
- 17 それを目にして羊飼いたちは、この幼子について自分たちに告げられたことを知らせた。
- 18 聞いた人たちはみな、羊飼いたちが話したことに驚いた。
- 19 しかしマリアは、これらのことをすべて心に納めて、思いを巡らしていた。
- 20 羊飼いたちは、見聞きしたことがすべて御使いの話のとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。

はじめに

待降節第4主日の朝を迎えました。今週金曜日12/25日がイエスさまの誕生をお祝いする降誕日です。救い主イエス・キリストの降誕に先立ち、本日の礼拝をクリスマス礼拝としてキリストにささげます。今年のクリスマス礼拝はすでに前半にたくさん賛美しましたように、賛美礼拝として準備して来ました。賛美は神さまをほめたたえ、私たちの信仰の証としての献げ物です。真心を込めた私たちの賛美を神さまは喜んで受け取ってくださいました。賛美は礼拝をささげる私たちと礼拝を受け取ってくださる神さまとの橋渡しを担っています。私たちの思いは前半の賛美で十分に神さまに届けられましたから、このまま礼拝を締め括っても良いのですが、短くみことばからイエスさまの誕生にまつわる賛美の恵みに思いを向けましょう。

1. 主の栄光が現れる

ルカ 2:8-20 は羊飼いたちにイエスさまの誕生のニュースが伝えられた箇所です。野宿で羊の夜番をする羊飼いたちに御使いが現れ、「今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。」(11節)と告げたのです。このときの様子を「主の使いが彼らのところに来て、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。」(9節)と記しています。「主の栄光が周りを照らす」とはどんな光景だったのでしょうか。それを知っているのはこの場面に遭遇した羊飼いたちだけですが、旧約の中に記されている「主の栄光」の現れから想像することができます。

最初に主の栄光が現わされたのは、イスラエルの民がエジプトを脱出しシンの荒野に入ったときです。民は空腹でモーセに文句を言うと、主は天からパンを与えてくださいました。毎朝、天からのパン(後にマナと名づけた)が与えられることを「朝には主の栄光を見る」(出エジプト 16:7)と言われたのです。次に主の栄光が出てくるのは、モーセがシナイ山に登り石の板(十戒)を授かる時のことです。主の栄光がシナイ山に留まり、山の頂上は火

で燃えているように見えました。このあとイスラエルの民は金の子牛を造る（偶像を造る）という大罪を犯し、モーセは授かった石の板を砕いてしまいます。モーセは民の赦しを求めてもう一度山に登り、再び石の板に契約のことば（十のことば）を書き記したのです。その後、主の命令により幕屋の建設に取りかかり、それが完成したとき主の栄光が幕屋に満ちました（出エジプト 40:34, 35）。それはとても神々しいもので、主の栄光に圧倒されてモーセは幕屋に入ることができませんでした。その後も神さまがご自分の臨在を示されるときに、主の栄光がイスラエルの民に現れています。

このように主の栄光は神さまの臨在のしるしであることは確かで、ひと言で言えば「主がともにおられる」ということなのです。

2. 天と地が繋がる

羊飼いたちを取り囲んだ主の栄光は、主があなたがた（羊飼い）とともにいるというしるしでした。しかし、そのような意味が羊飼いには理解できません。そこで御使いは、主がともにおられることの具体的なしるしとして幼子イエスの誕生を告げ、飼葉桶に寝ている赤ちゃんとの出会いを用意してくださったのです。

このときもう一つの不思議な光景が描かれています。それは御使いとともにおびただしい天の軍勢が現れ、「いと高き所で、栄光が神にあるように。地の上で、平和がみこころにかなう人々にあるように。」（14 節）と神さまを賛美する声を聞いたのです。この賛美の中にも「栄光」ということばが出てきました。この賛美は並行法という文体で書かれていますので、天での栄光は地での平和を表しています。天での栄光をお持ちの神さまが、一人の赤ちゃんの姿を取って地に来られ、地に平和をもたらしてくださるという約束が込められているのです。この赤ちゃんこそが「平和の君」（イザヤ 9:6）と呼ばれるイエス・キリストであり、イエスさまは天の栄光と地の平和を一つに繋ぎ合わせてくださったお方なのです。これが今日イエスさまの誕生をお祝い

する意味ではないでしょうか。「神が人となる」、「天と地が繋がる」、そして「神は私たちとともにおられる」、これらのことがイエスさまによって成就したのです。ここにクリスマスをお祝いする真の理由があるのです。皆さんは毎年巡り来るクリスマスをどのように過ごされるでしょうか。コロナ禍で例年とは違ったクリスマスを迎えようとしています。この2,000年間、クリスマスの迎え方は時代や状況によって様々であったとしても、天の栄光を携えて地上に来られたイエスさまの意義はいささかも変わっていません。そしてイエスがおられる所に平和が満ちることも変わってはいないのです。

もし私たちの周りに平和が失われているとするなら、平和の主であるイエスさまをお迎えしていないか、あるいは私たちの人生から締め出しているかのどちらかです。華やかなクリスマスの背後には、神さまから離れた人間の現実があり、そこから生じる人間の罪を否応なしに知らされることとなります。クリスマスは地に平和がもたらされるために、神さまに立ち返る人々が起こされることを願う日でもあるのです。

3. 賛美のささげもの

クリスマスに遭遇した人は、地上の平和を得るだけではありません。羊飼いたちがそうであったように御使いたちの大賛美に合わせて地上でも賛美する人に変えられます。「羊飼いたちは、見聞きしたことがすべて御使いの話のとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。」(20 節)。当時羊飼いたちの社会的立場はとても弱く、社会の最下層に位置づけられていました。同じ部類に取税人や遊女といった人たちがいて蔑まれていました。彼らは貧しかったので救い主の誕生に遭遇してもささげる物を持っていません。東方からやって来た博士たちは黄金、乳香、没薬という高価なささげ物を携えてやってきましたが、羊飼いたちはささげ物を用意することができないのです。

ささげ物は用意できなかつたとしても、それと同じくらい尊いささげもの

をしました。それが神さまを賛美するということです。賛美のささげものをしたのです。私たちも東方の博士たちのようなささげ物は用意できなくても、主を賛美する唇が与えられていますから、私たちの口をもって救い主イエスさまの誕生を喜び、主をほめたたえましょう。羊飼いたちは「賛美しながら帰って行った。」(20節)とあるように、幼子イエスさまにお会いした後は賛美しながら自分たちの生活の場へと戻って行きました。イエスさまにお会いする前と後の変化は、実は私たちが毎週の礼拝で経験していることではないでしょうか。一週間の営みを終えて礼拝に集う私たちですが、いろいろなことがあった一週間だったと思います。大変なことや辛いことがあったかもしれませんが、礼拝を終えて帰るときには心に賛美が溢れているはずです。それは、羊飼いたちが幼子イエスさまに出会ったように礼拝の只中におられるイエスさまに私たちの魂が触れたからです。毎週イエスさまに触れて、賛美をもって新しい週を出発しましょう。今週の歩みが賛美で満たされるようにお祈りします。

まとめ

クリスマスの出来事と賛美は密接に繋がっています。その恵みを真っ先に経験したのが羊飼いたちでした。今年のクリスマスはコロナ禍でいろいろな制約の中迎えます。私たちの教会でも12/24のキャンドルライトサービスは20:00からオンラインで短く行います。今日の礼拝と同じくSkypeによって配信しますので許される方はご参加ください。救い主イエスさまの誕生と一緒に喜びお祝いしましょう。賛美は私たちを力づけます。イエスさまとの出会いによって、一人一人の心に賛美の恵みが注がれますようにお祈りします。